



# コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



出版は大半が自費



但馬文学会同人誌「野火」



何百冊もの資料に囲まれ筆を執る

**身近で偉大な人物を知ってもらうため、小説という形で残したい！**

かつて小・中学校で教壇に立ち、退職後、但馬地域出身の人物を小説に描いている元気な男性を紹介します。

みずしま 水嶋

元さん(83歳) 日高町広井

日高地域の自宅で小説を執筆し、その大半を自費出版しているのは、水嶋 元さん。

本来、ものを書くのが好きだったという水嶋さんは、教職員時代から、但馬の歴史や時代小説を書きたいと思っていました。退職後に本格的に執筆活動を始め、但馬地域の人物に焦点を当てた小説を世に送り出しています。

## 作家になりたい… 教職員時代からの夢！

一期は、職を辞めてまで作家になろうと思っていた水嶋さん。「作家になろう」と思うきっかけは、ある小学校で担任をしていた頃、授業の環境で創作童話を書いていて、同時に短編小説を書き始めたことでした。しかし、作家での生活は不透明で、周囲の反対などもあり、教職に専念することとしました。

退職まで持ち越した夢の現です。執筆活動に当たっては、但馬地域の文学振興を目的に、志ある方々と「但馬文学会」を設立し、文学執筆の拠点としました。同会は、年に1〜2回、同人誌「野火」を発行しています。

## 自らの小説を出版

「本の題材は、遠くより近くの人物を取り上げたい」と思い続ける水嶋さん。最初に出版したのは『ひめくりの詩』で、豊岡の杞柳商人が描かれています。次いで『山名宗全』。但馬全域をも治めた山名氏を描くため『但馬史』や旧1市18町の市町史を読み、京都の資料館に通っては資料などを収集して書き上げました。

後日出版された本の中に、コウノトリを擬人化した作品『紙の窓』があります。水嶋さんは自ら、国内最後の生息地(豊岡の六方田んぼ)で、コウノトリを観察して、「コウノトリをはじめ、日本文化の美意識を織り込んだ作品に仕上がった」と誇ります。

## 周囲の協力を忘れない！

水嶋さんは「どの小説でも資料収集は大変だが、取材するときの楽しみがある。資料調査のために遠方に行く旅行(海外も!)がその一つ。調査のためとはいえないものの、教職員仲間や友人の協力があってこそ」と話します。そんな水嶋さんは出版時、あとがきに協力者に対する感謝の言葉を

添えることを忘れません。

## 「文学」へのこだわり

水嶋さんは「周囲から、時代小説みたいな難しいものではなく『野火』に寄稿するような私小説的なものを書いてみれば、と言われる。文学自体が『難しい』と思われがちだが、あえて人物を描いた時代小説にこだわりたい」と語ります。「但馬地域出身の偉大な人物がいる。地元ですら知られていない方を記録(郷土偉人伝記など)し、世に知らせたい。そして、これらを読んで『小説を書いてみたい』と発奮する若者が出てほしい。その一端を担えれば」と期待を込めます。

## これからも書き続ける思い

「構想を頭に思い描きながら小説を書くのは楽しい」と言う水嶋さんの趣味は「ストレス解消にピアノを弾くこと(笑)」。楽譜を見ながらだ目や頭が痛くなるので楽譜なしで弾くのだとか…。

今後も執筆を続ける水嶋さんは「豊岡は題材が多く、もっと書きたい。明治から昭和の群像を、ぜひとも仕上げてみたい」と熱く語っていました。

# ま ち の 話 題



▲口で吹く、弦をこする、はじく楽器の組合せ

豊岡靱協会からNOMOBベースボールクラブへ  
選手用かばんの贈呈

かばんを通してクラブをPR!

2月27日、市役所城崎支所で、豊岡靱協会からNOMOBベースボールクラブへ選手用かばんの贈呈が行われました。

贈呈されたかばんは、トートバッグとリュックのセット(計30セット)で、トートバッグがリュックの中に納まるため、選手がシューズやグラブなどの野球道具を入れて自転車などで移動するのに最適。

同クラブ代表理事の野茂英雄さんは「今回は、私のアイデアも取り入れてもらい、素晴らしいかばんを作っていただきました。このかばんを持って、ぜひ、都市対抗に出場したい」と話しました。



▲豊岡靱協会会長 卯野隆也さんからかばんを受け取る野茂さんと清水監督

二胡とハーモニカ演奏会

聞き慣れない二胡の音色に心酔?

3月9日、二胡とハーモニカ演奏会が福祉地区公民館で開催され、約80人が来場しました。

第一部では、二胡とアコースティックギターが協演。宝塚歌劇でおなじみの「すみれの花咲く頃」や映画「夜霧のしのび逢い」などの曲も奏でられました。

第二部では、ハーモニカ演奏の後、会場は「うたごえ喫茶」に早変わり。参加者のリクエスト曲を数曲、全員で歌いました。

楽しい時間もあつという間に過ぎ、演奏会は、二胡、アコースティックギター、ハーモニカの協奏で幕を閉じました。

※二胡：中国の伝統的擦弦楽器

## 笑顔の輪

いつの時代も変わらぬ書の魅力  
合歓の木、木犀会(豊岡)

書くことで文字の美を表現する東洋の造形美術「書道」のサークル「合歓の木」と「木犀会」は、きょうだいです。共に、旧労働会館で開設された書道基礎講座の修了生が設立しました。

メンバーは、短くて2年、長くて10年を超える方も多い歴史あるサークルです。



▲昇格試験の出品作品の選考風景(「合歓の木」)

書は、漢字、かな、ペン、細字、漢字条副、かな条副、古典臨書の中から、最低4種類を選び、競書に参加して、級や段位を受けます。また、但馬書展や京都の展覧会に出品することもあります。

メンバーは「手本をしっかりと見て、1日に3枚書きなさい」という言葉を守り、頑張っています。指導者の高橋さんは「字を書くことは一生。個人単位の教室と違い、サークルは皆さんが仲良く、和があり、難しいことも楽しく、長く続けられます。私は、先生というより、知っていることを伝えていくという気持ちです」と話していました。

さんが指導しています。入会理由を聞くと「きれいな字を見ると、どんな素敵な方だろうと思う。書は内面磨きができる」「字がうまくならない」「ずっと書をしたかった」「長く続けられると思って」「書は難しいけど、奥深い」など、さまざまです。

食事会でいろいろ語りあうことも。楽しい雰囲気も、サークルが長続きしている理由です。